

～旧約聖書を読んで感じること～ (91) ユダの女王 アタルヤ

ユダとイスラエル王国の同盟のため、ユダの王ヨシャファトはアハブ王の娘アタルヤを息子ヨラム (Jehoram)の妻に迎えていました。政略結婚で王女は敵と見なされる相手方にいわば人質となって嫁がされます。そのことは争いを避けて平和を作り出したり、文化の伝播や、相互の助け合いが勢力の拡大になって、良い面も生じてきますが、当人にとっては困難に直面することであり、忍耐を強いられることでもあるでしょう。アタルヤは母イゼベルの生き方を模範に、また、親の信仰を自分のものにして生きてきたのです。バアル信仰をユダにも推進させ、夫や子を感じました。女の力は侮れないのです。

ヨラムはアタルヤに影響を受け、王位に着くと、自分の兄弟を殺し、王位の安泰を得ましたが、在位8年不治の病で亡くなりました。子のアハズヤが即位したものの、すぐにイエフに殺されてしまいました。アタルヤは若くして寡婦になり、その1年後には息子を失いました。さらに、44年続いた王国、自分の故国、北イスラエルがイエフによって乗っ取られ、王族全てが殺害され、バアルの神殿も破壊されたことを知った時、後ろ盾を失い、一人、ユダ王国の王母として生き残っていました。

アタルヤは報復の思いがあったでしょう。また、帰るべき家のないアタルヤは、ユダ王国を自分のものにしてしまわなければならなかったのでしょうか。王位に着き、ユダの王族全てを粛正しようとしています。そのため彼女自身も手を血で染める暴虐の道を選んだのです。

アハズヤの母アタルヤは息子が死んだのを見て、直ちに王族をすべて滅ぼそうとした。しかし、ヨラム王の娘で、アハズヤの姉妹であるヨシェバが、アハズヤの子ヨアシュを抱き、殺されようとしている王子たちの中からひそかに連れ出し、乳母と共に寝具の部屋に入れておいた。人々はヨアシュをアタルヤからかくまい、彼は殺されずに済んだ。こうして、アタルヤが国を支配していた六年の間、ヨアシュは乳母と共に主の神殿に隠れていた。(列下11:1-3)

亡き息子アハズヤは、ベエル・シェバから妻ツイブヤを得て、二人の間の子ヨアシュが生まれたばかりでした。アハズヤの姉ヨシェバは祭司ヨヤダの妻として生き残っていました。彼女がヨアシュを助めました。母親のツイブヤの記述がもうありませんから、その他の側女の王子たちと共に、アタルヤに殺されたのでしょうか。ヨアシュだけが叔母ヨシェバによって神殿にかくまわれ密かに育てられ、また、祭司ヨヤダから信仰を学んで成長していったのです。



ヨアシュの即位 Edward Bird

ヨアシュが7歳になった時、祭司ヨヤダはヨアシュを王として立てることを決意し、兵を組織し、警備を固め、主の神殿に彼らを集めました。

ヨヤダが王子を連れて現れ、彼に冠をかぶらせ、掟の書を渡した。人々はこの王子を王とし、油を注ぎ、拍手して、「王万歳」と叫んだ。アタルヤは近衛兵と民の声を聞き、主の神殿の民のところに行った。彼女が見ると、慣例どおり柱の傍らに王が立ち、その傍らには将軍たちと吹奏隊が立ち並び、また国の民は皆喜び祝い、ラッパを吹き鳴らしていた。アタルヤは衣を裂いて、「謀反、謀反」と叫んだ。(列下11:12-14)

ヨヤダの周到な計画のもと、ヨアシュが王となり、アタルヤは殺されました。主の前で、王ヨアシュと民は、主の民となる契約を結び、また、王と民の間でも契約しました。バアルの神殿、祭壇や像を徹底的に打ち砕き、祭司も殺されました。こうして、国の民は皆喜び祝った。アタルヤが王宮で剣に賭けられて殺された後、町は平穏であった。(列下12:20)と記されています。